

(大島郡笠利町宇宿大籠)

位置と環境

貝塚は笠利町東海岸のほぼ中央に位置する。標高約13mの砂丘上に立地する。

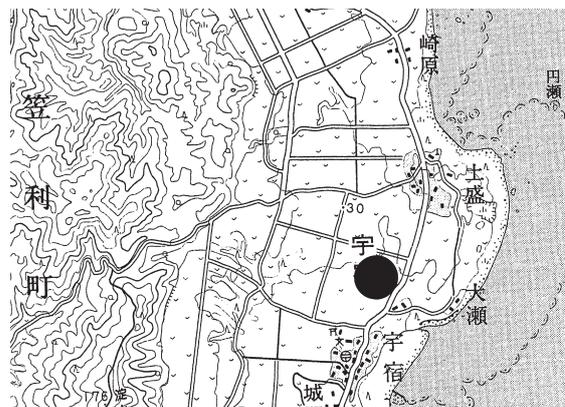
笠利半島の東海岸は西海岸にくらべて、砂丘が発達しており、その大部分は遺跡になっている。半島北側から主な遺跡として用見崎遺跡、用ナビロ川遺跡、笠利ウーバルグスク、辺留グスク、アヤマル第1・2貝塚、喜子川遺跡、マツノト遺跡、土盛遺跡、宇宿貝塚、宇宿高又遺跡、宇宿港遺跡、宇宿ダンペン山遺跡、宇宿小学校構内遺跡、万屋グスク、万屋下山田遺跡群、和野長浜遺跡群、土浜遺跡、土浜イヤンヤ洞窟遺跡、用安湊グスク、赤尾木ウフタ遺跡、手広遺跡などを上げることが出来る。

遺跡の立地も旧石器時代は山手の赤土層、縄文時代は山手に近い古砂丘、弥生・兼久時代は海に近い新期砂丘へと移行する。

宇宿貝塚の立地する砂丘は北側端に標高18.9mの小山に接し、西南は標高4mの低地をなす。貝塚指定部分は約492m²の小高陵をなし、北東、南西方向に長く、独立した地形をなしている。

調査の経緯

昭和8年(1933年)に京都大学三宅宗悦博士によって発見される。その後、奄美大島日本復帰(1953



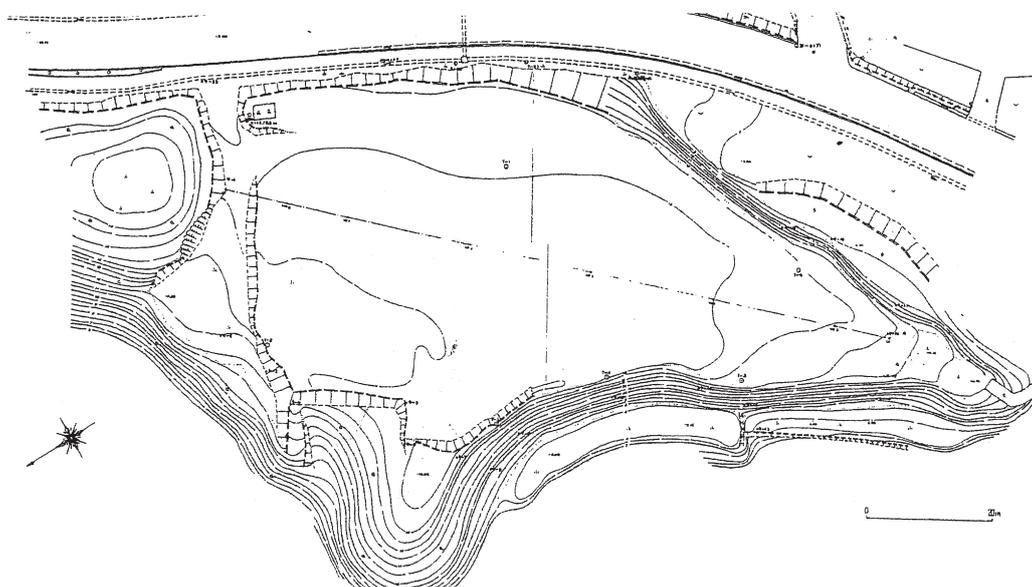
第1図 宇宿貝塚の位置

年)間もない昭和30年(1955年)に九学会連合奄美学術調査団による発掘調査が行われた。

その後、昭和53年(1978年)に笠利町教育委員会が遺跡の範囲確認調査を行う。踏査の成果に基づき、地権者の同意を得て昭和61年(1986年)10月7日に国指定の史跡になった。平成2年から平成4年(1990年から1992年)にかけて指定地の公有化をおこなう。

平成5年から9年(1993年～1997年)にかけて宇宿貝塚の整備に伴う発掘調査を実施した。

平成9年から平成12年(1997年～2000年)まで宇宿貝塚保護覆屋整備事業が実施された。遺構露出展示部分101m²と床面積1,123,517m²を覆う保護覆屋整備事業は第1次整備事業を終了する。平成13年度は保護覆屋の中を町単独事業で整備を行った。平成14



第2図 宇宿貝塚地形図

年（2002年）オープンした。

遺構と遺物

昭和30年の調査では上層から無文土器、下層から有文土器が出土する。上層から出土した無文土器を「宇宿上層式土器」下層から出土した有文土器を「宇宿下層式土器」と命名し、奄美の土器標識名になる。

遺構として方形の石組み住居跡も確認されている。

昭和53年の発掘調査では遺跡の範囲確認調査が行われた。その結果遺構では昭和30年に発見された石組み住居跡と新たな住居跡も発見された。住居跡の近くには貯蔵穴もあり、貝塚が定住地としての可能性も強くなった。

出土遺物も南九州の市来式土器や市来式土器の影響を受けたと思われる土器も出土しており、南九州との深いつながりが伺える。

母子埋葬の人骨は特に注目された。両手を胸と腹部におき、両足は延ばしており、左足は僅かに屈折

している。いわゆる「伸展葬」である。さらに両足の関節部分に4個の礫と磨製の小型石器が配置されており、その石器を取り除くと直下に嬰兒骨が出土し、母子埋葬であることがわかった。

成人骨は調査の結果、身長145cmで四肢骨の粗面が発達しておらず、生前労働に従事していなかったのではとされている。年齢は20歳～25歳の女性で、ガラス製の玉など46個が頸にかけたような状態で右耳のあたりから後頭部にかけて出土した。

嬰兒骨は成人骨の両脚の間にはさまれた状態で成人骨と逆方向埋葬され、頭部から脚部までの長さ30cm、幅15cmの範囲に埋葬されていた。

平成5年度から宇宿貝塚保護覆屋整備工事に伴う発掘調査が平成9年度まで行われた。この調査で更に12, 3世紀のV字構が発見された。V字構は西側から東側に蛇行した状態である。まだ完全に発掘は行っていないが、試掘トレンチではV字構の底からカムイヤキも出土している。

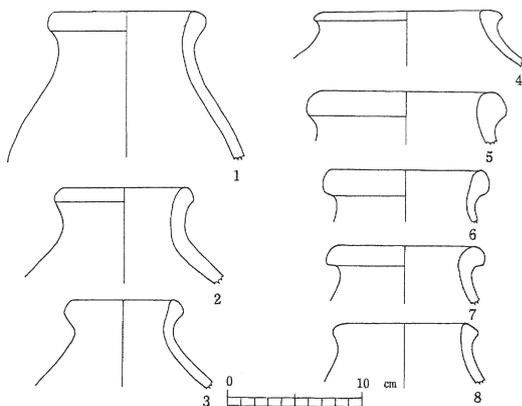
貝塚東側から12, 3世紀のピット状遺構も検出されており、何らかの建物遺構もあったと思われる。ピットの中には柱を固定するための石もピットの内壁から出土している。

ここからも埋葬小児骨1体がカムイヤキを副葬品として浅い掘込みから出土している。頭骨はつぶれているが保存状態は良好である。カムイヤキは頭部近くに副葬されており、壺は完形のまま土圧で押しつぶされた状態で出土した。壺の中からはガラス製の小玉1点が入っていた。

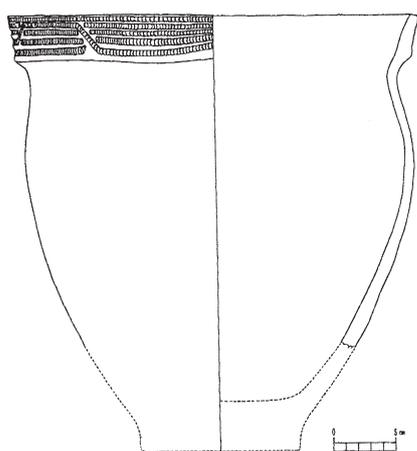
特徴

標高約13mの砂丘台地に縄文時代、弥生時代、古く時代時代の遺物が出土する複合遺跡である。

縄文時代は宇宿下層式土器と南九州の市来式土器が供伴しており、南九州から南下していることがわかった。市来式土器はさらに南下し、沖縄県浦添貝塚でも発見されている。石囲い住居跡に土構などを伴い海産物を主に魚や貝を豊富に採集している。また動物性タンパク源としてリュウキュウイノシシの骨なども出土している。貯蔵穴の中からは炭化したシイの実も検出されており、これらの出土遺物から考察すると縄文時代の宇宿貝塚人は海の幸、山の幸



第3図 宇宿上層式土器



第4図 宇宿下層式土器

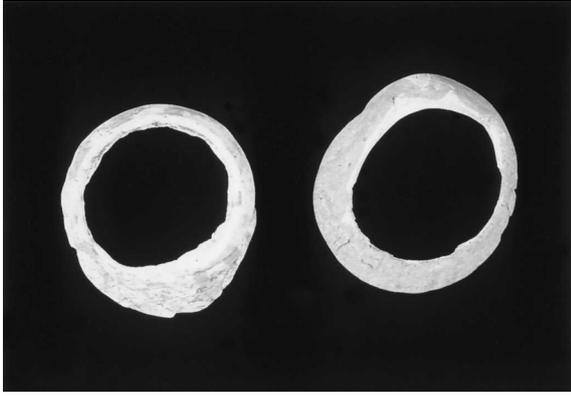


写真1 貝製品



写真2 骨製品



写真3 カムイヤキと小児人骨



写真4 石組み方形住居跡



写真5 玉を含んだ小児人骨



写真6 12, 3世紀のピット遺構

を採集して、生活を送っていたと思われる。

弥生時代に代表されるのは母子人骨であるが土器は九州などから入った弥生土器は現在のところ検出されていない。宇宿上層式土器が弥生時代に相当するのではないかなどの説があるがまだ結論は出されていない。

奄美のグスク時代は宇宿貝塚西側にも立地しているように集落後方にある小高い丘に形成もの。山中にあって山裾を掘り切り、独立させたもの。舌状に海に面した台地に立地するものなどがある。宇宿貝塚に形成されたグスクは生活跡である。柱穴や土壇墓などがあり、V字構も入っている。このようなV字構は万屋グスクにも類例を見ることが出来る。

資料の所在

出土遺物は、宇宿貝塚史跡公園保護覆屋に保管・展示されている。

参考文献

笠利町教育委員会1979「宇宿貝塚」『笠利町文化財報告書』 1

笠利町教育委員会1997「宇宿貝塚出土人骨偏」『笠利町文化財報告書』 23

笠利町教育委員会2001「国指定史跡宇宿貝塚」『整備事業報告書』

(中山清美)



写真7 宇宿貝塚保護覆屋



写真8 宇宿貝塚検出状況